

⑨ 日本国特許庁(JP)

⑩ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報(A)

昭63-159338

⑬ Int.Cl.

識別記号

庁内整理番号

⑭ 公開 昭和63年(1988)7月2日

C 07 C 53/10
51/41

6692-4H

審査請求 未請求 発明の数 1 (全2頁)

⑮ 発明の名称 酢酸マグネシウムの製造方法

⑯ 特 願 昭61-309784

⑰ 出 願 昭61(1986)12月24日

⑱ 発 明 者 青 野 哲 士 新潟県新井市白山町2丁目5-1
⑲ 発 明 者 尾 崎 孝 司 新潟県新井市石塚町1丁目6-2
⑳ 出 願 人 グイセル化学工業株式 大阪府堺市鉄砲町1番地
会社

明 細 書

1. 発明の名称

酢酸マグネシウムの製造方法

2. 特許請求の範囲

炭酸マグネシウムまたは酸化マグネシウムと酢酸との反応で酢酸マグネシウムを得る製造方法において、粉体状の炭酸マグネシウムまたは酸化マグネシウムに酢酸を少量ずつ添加し、粉体状のまま反応を終結させることを特徴とする酢酸マグネシウムの製造方法。

3. 発明の詳細な説明

(産業上の利用分野)

本発明は酢酸マグネシウムの製造方法に関するものである。

この酢酸マグネシウムは医薬原料、有機合成触媒等として広く利用されている。

(従来技術およびその問題点)

酢酸マグネシウムは、水を溶媒として酢酸に酸化マグネシウムまたは炭酸マグネシウムを作用させ、水溶液から酢酸マグネシウム結晶を取り出す

ことにより製造されている。このため得られる酢酸マグネシウムは通常4水和物であり、これを更に脱水するためには多大のエネルギーを必要とする。

又、晶析、乾燥等が必要であり工程が複雑である。本発明は簡単な工程で、低水分の酢酸マグネシウムを得ることを目的とするものである。

(問題点を解決するための手段)

本発明者らは、酸化マグネシウムまたは炭酸マグネシウムと酢酸との反応で生成する水は酢酸2モル当り水1モルであることに着目し、反応方法を鋭意検討した結果、おどろくべきことに水を溶媒とせずとも、粉体状態のままで反応が進行し、酢酸マグネシウムが得られることを見出し本発明に到った。

即ち、本発明は、炭酸マグネシウムまたは酸化マグネシウムと酢酸との反応で酢酸マグネシウムを得る製造方法において、粉体状の炭酸マグネシウムまたは酸化マグネシウムに酢酸を少量ずつ添加し、粉体状のまま反応を終結させることを特徴

とする酢酸マグネシウムの製造方法である。

本発明を実施するにあたっては、例えばニーダー等に仕込み、攪拌されている粒体流動状態の炭酸マグネシウムまたは酸化マグネシウムに1～1.2倍当量の酢酸を徐々に添加して反応させればよい。

反応は10℃～100℃程度で、通常は室温で実施される。

原料に無水のものを使用すれば、水分は反応で生成する量だけであるから特に脱水等の乾燥工程がなくても酢酸マグネシウムの1水和物が得られる。

又、添加する酢酸中に適量の水を加えておくだけで製品・酢酸マグネシウム中の水分量(1～4水和物)を任意に調整出来る。

(発明の効果)

本発明の方法により

- 1) 晶析、乾燥工程を必要としない簡単なプロセスで
- 2) 低水分の酢酸マグネシウムを製造すること

は98.8%に達していた。

実施例3

酸化マグネシウム0.605Kg(15.0モル)(水分0%)を6ℓニーダーに仕込み、これを攪拌しながら水分23.0%を含んだ酢酸2.34Kgを2時間かけて仕込んだ。

仕込終了後攪拌を停止し、粉体を取り出した。

取り出した酢酸マグネシウムの水分は27.4%であり、3水和物に相当する量であった。反応率は98.5%に達していた。

ができる。

- 3) 又、1～4水和物を任意に調整することができる。

実施例1

炭酸マグネシウム0.500Kg(5.93モル)(水分0%)を6ℓニーダーに仕込み、これを攪拌しながら酢酸0.712Kg(11.9モル)を2時間かけて仕込んだ。

仕込終了後攪拌を停止し、粉体を取り出した。

取り出した酢酸マグネシウムの水分は11.1%でありほぼ1水和物に相当する量であった。反応率は96.4%に達していた。

実施例2

酸化マグネシウム0.605Kg(15.0モル)(水分0%)を6ℓニーダーに仕込み、これを攪拌しながら酢酸1.803Kg(30.0モル)を2時間かけて仕込んだ。仕込終了後攪拌を停止し、粉体を取り出した。

取り出した酢酸マグネシウムの水分は11.2%であり、1水和物に相当する量であった。反応率は

代理人 越 場 隆